朝夷巡嶋記第八編 三

113
939
338

門イ13
號939
函232

朝夷巡島記全傳第八編卷之三

東都　松亭金水編次

續輯第十五

草菴の奇遇源家の殃　道人無為の教を説く

吉見の冠者義邦いかの夢葬ふ誘いまて。枝折戸とうち開き入りて人々ふ若僧ぐまづ此方へと案内とゑすゑそ侍る方丈ぐらの。菴の狂入りるゐ竹ぐ編て部とる。茅とりて家根とる。畳いるくて簟の。彼まこと侍ば敷列ね四壁るけまぐ吹入る。臥さえそ此ふ染ゐて。奮さる雀子ふ湯い沸まろ若僧いまろその湯と汲て別るいぬ山路ふい然こそ困しゐひけ。咽ぐ濕しゐひね。と薦もるゐ歡ぐくて冠者い喉の乾けるまふ。温湯ゐ甘露のぬくふ呉ぐえて。三杯ぐ喫しい。彼若僧ふ

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

對ひていはく。尚ほ在下と誘ひしに。この菴の主なる。名は夢窠こくしと。躬歸さをひてなり。然るあれども奈何なる人の墓と遊てこの所ほ行ひ澄して居るぞ。ねんごろに貴こく覚えるこ。道まあくこに形てこそと昔の人のいひしことを今更思ひ出らまとる。さまと暮らしの年老て世の甘きこと辛きこと。よく意得て火のうちほ栖と厭ひて世と遊ぶの。往古ようるなるほ。あるこの足下いまで三十めに程ありとうなる。死ほて。俱ほ浮世と悟られる。こいのうくほ有難さ。善智識ほ坐すそう。と賛らまて北叟咲宜ぶく貧尼。若年のうこ才弛く出離生死の理と爭う悟さへきるまと。夢窠に在俗の主人ほそ幼少より恩遇渥。殊ほ他のうく寵と被り。主人に入るほも出るほも。吾と伴ひしこと。先頃世と遁まのこと。眤近の士も多ありしこと。出て技て吾ほつこ。如此と思ふと宣ふ。どほいとは心決のなく。假令野ほあれ

山ほあまと在下とに伴ひの人愚なりとも心と責て。仕へまつらんこと久しけれども。その赤心は平生こと。故ほ汝のこと告る。然れば吾と共ほ来れと主従こと定て。びと出て種この難苦ありこまと操と易べきこと。ねんごろに首と剃て徒弟とあり。今日まで傳副ひありと語まに冠者は心ほ黙既さそに。夢窠に廣綱ほこの若僧こそ加世尼ありめ。初こも顔して餘所なりこと。後のこと問て又たびと思ふこそりこも外面より夢窠に徐こ入来り。客人然こそ待佗のいめ。今師の許へ往る。日は曉の勤行ありて霎時其処ほ待るるりとのひいく冠者が對ほ坐して。さて足下と在下とに遁まあくさる身なりほ。折ありて相見せずかるこの初見参。武士の道ほ愧まとこまる然るべき奇遇ほこそ。拵在下に源三位頼政の孫ほ。武蔵の太田ほ世と遊る多田前司廣綱と陸奥の賊ほ經任に退治せよとの台命あり。則養子光仲と大将軍ほ在下に副将とて奥ほ下る。

鎮守府に在城して合戦の動静を窺ひ賊徒滅びて婚光仲凱陣と変ずる及び在下元未遁世の志は頻りなるとて一人の女児を遺して世を棄かくそくりと憶らさり光仲と婚とりの世は浮世不要の暴ふさ〳〵とそひさち童よりして侯近く不仮の者ふ百おきさる加世丸と伴へて人をこれ城を出一小菴ふて頭を回ら

さて所々と遍歴するふ上野なる榛名の山憶ふくも異人ふのひそのの名と問へ乾坤道人まこと太極無形道人とのふ胄て日本の隈々ふ到らざる所なく一

うひ思ひ起しる志願を果さて止むべしと勇猛ふ勤行なれと世の容ごとなるふつけ。

その比いまさ俗情の失やすきして折もあらば所と立家とも興さんと思ふ念慮

もあれども年を累ね日を積て漸く老荘の元と悟りて塵世を離へそとり。

世間の治乱得失おとび一とび面とうくなる人の吉凶禍福と悉く掌を指ごとふ知

まとのよく火宅を厭ひ果さとりうるふ和主等世を避て無為の域ふ入らんとしてかく

姿をび更るとのともいまさ真の道と知るわば俗中の桑門ふて道をさう

といふべきなれ。倘道を果んとなる吾ふ従て修行せよ半年ふて自然ふ悟る

所あらんとその説極めて理なるまび。そもそもより道人ふ随従て居ふて

ふ人間世の景勢は浮める雲ふ異なるまび。今いその術漸こふ閑るこまびなる

ねとも。芸技厥ふぞくりは暁まり。然るふ尚ふもいとめて。道人は足に小なと遁

まと因縁ある者なるまび。危難のあらんと頻察し心を用ひらるべき危難人ら

神機妙算。雲と呼び風と起し。鬼神と役使すとあり。さんと貧乏の刑のま

は真偽と決しらまとあるまび。疾なさて道人。譚とも皮を人しとうと分れ上成

語るまと義邦は始めより。然るべんとは推せしなば。今躬名渇とり化少く摩と

遊て額著いて。佞は廣綱大人なりしと宣ふべく経仕滅び凱旋のはふ。大人は一

首の方と遺して世と遁まとのとと皮光仲はふ及ふ。朝夷義秀その腋の

法士かくまうす在下まで心と痛め手と頒て。住方と探せしと。で聊の手
掛りのこ夫より後い東西の疆ごふも知れねば歌くだりで住方の。夫より荒
人光仲おとひ在下なる一容ふ。藤倉へ移し処箇様ごの厄難おりて。脱禁
錮せまつも。義秀ご朋友の信とりて扶けるる。一伍一什の長物語然いしくとも
岐のくと光仲と指ゐ吾此のう細やうふ綿りい。初て在下い武蔵ある石戸の荘
と先行いと近曽入郷せ処如此ごうりと今日ふ。ゐるまでと物ごとまで深慮
い岐果て。吾その御より山野と家ごう。人の交ごと断ごまで空ごう風の仮ふも。
夫等と知ることるりしふ。師の乾坤乾人い如何ふ。ゐる是と知り。将軍家の暗
弱ある。まと北條家の佞邪ある。脱ふとふ及びりと。結り岐ーあひーが今足
下の物語と一点も差なと符合せり。師い一室とも出ずして。箇計りのこと知りと
まつい。実ふ當世の神仙ごまで足下ゐ此の災害と未然ふ察知ーあくと。

まつと髪髪ふ差ひあくめやまで頓やまで見奉ーと。ゐ後のこも向ふ。と義邦と
誘ひとゐ出ゐその時ふそや白ごと明ひまでゐ。初て夢幻ふ案内ふゐう傷ある
菴のうちゐう。徐ごと立出ゐかの乾坤乾人ふて。此ふい道服ゐのゐ。瘦ひまふ
一條の杖と携え。鶴髪ふて難ごふ。白銀の針のゐ。実ふ寿い百歳ふも落れる
うとりんまで童顔ふて。その容貌麗ある。待者いゐるより貴ごふ拝せんと
まるるその時捕へて。まつ上座ふ居つ。道人未坐ふ称ごて。在下い君の
此父蒲殿の門ふて。三の者と呼まるる。當麻太郎ふ弟ふて。在俗の名い當
麻瑳次郎房光とまつゐる。脱ふ故殿北條ふ。好孫の魂ふゐう。寛ご
被ゐりふ。ひーとき。兄ある太郎いふも。その虚実ごふ。ごんと。俱ふ傷ごゐり
ゐ。営中の床ふ忍び。密ふ便宜と。窃ごふ江間義時ふと。出さまで。脱ふ孫と
稟ひまさ。頃在下い局住ふて。その事ふ異ゐるれば。幸ひふ。て。窃ごふ免れ蒲殿

伊豆の修禅寺に蟄居とありしが故郷を迷ひ出し熟世間を厭ずるに人の禍福栄辱は善悪の果報にあらず時の幸不幸のごとくにて今こそ仕へ素わ名を揚家を興さんの志を捨て無為の境に拠んとこころ発して出家となり禅の苦行をして道を修するこころにとどめ元来浅智純なる故動すれば世利に曳まれ胸中に粗忽ひとしきに自躬誡め励まし或異人に従ひて修する事二十余年今は漸く六通をなして世界の浮沉治乱興廃居ながらにして知る及びていよく塵世火宅となるさまこそ今は法師にあらず修験にあらず仙者の渡優波塞に比ひるまと神仏儒を偏らず乾坤を家とし山川を器とし勝地に拠びて无為を楽しむ然るに四海の无多を欲ひ世界太平をこそ願ふ然るに頃北條氏日来に倍して好戦に驕り既に主家を傾けて吾家を富んとす故に君は蒲殿の正き嫡子なるを

りて忌おりふしに蛇蝎の如く事あらばと假託て害めんとすれども君は温厚篤実にして幸の名しるに不のけまた世の人口を憚て這田石戸の寒郷に蟄邑にすれども一は連枝の好しを表に君に安堵せしめその心を和めんとまるこころ尼深く軒端に宮小四郎弘義縁て石戸に望こまりこと以て仆を失ひ北條氏に歎ぜ北條楽に容ぜずと示し若義邦に失ぬその遠疎いその子の董次秋弘に賜らんとこれに於て宮小四郎君を図ると動ぐ遠田竹塚とに不住に陸陽推歩に名をはる修験院酷残は往昔の妻倍の晴明まと越の國の大徳にて稍亞べき法師なり術を究むるの故に金銀資財を長へて君を呪詛せんとを憑む酷残その利に眼瞑て神祭て君が床に埋こ五鈴を寄せ儀さんとすれども邪は正に勝て難し因て且こは悲のとも竟に不その邪術の為に所を失ひ吾ものを疾より暁り既に法会に在する

時より一小狗を左右に侍らす。その術を壓するゆゑに昨日狩矢の時
隱川にて小狗を失ひより妖魔の邪術忽地に亡びて既に死せり。
絆あるゝんと也。時に小狗あるゝ且く妖魔を退ぞけ。こゝに見ゆる奮老
に報うべきの志あり。當下狩者の勇名を聞まず。妖魔を撃んとせしに
渾身疲て手足動かず。こゝに彼狩者の奇特にして邪を去り怪應あり。怪
行に應ずるうんやに不佞奮好に報いんとして丹心を抽るゝの甲斐あり。悪を去り
自他の歡び何ぞこゝに加ることゝ一姑絶と説くるに天狩者に當るの
うちに夢うる心地して其の不可思議を感じ。吾恩にして新たに。巧まれ
ると一点ありまで。既に死地に就きて道人の術にかゝりて再生すること。
その恩に應ずべきを。いかゝ中のまゝとなく。彼小狗並松なり。未だ小狗
と仕へ。つゝ侍と獲ら也のゝ。かの六尾の故なるべけまど。狗ハ生の狗なるべ

ら。頼くいその所謂と。愛ま欲しとのひるるに。道人笑つて小術と不佞往昔九
州に西きその帰路に四国と遊ぶこゝに大神の術とのふあり。吾こゝと然んと。
或人に統て学びとるに。悉くこゝに邪術あり。一も取べき所なけまど大方にて
学びと畢む。彼地と退き山陽山陰北陸等と遍歴して。今君の郷に
及び天神の法とりて。一小狗を現ずるゝ。一且妖魔を遂ふに足まり。則
その法術と試に施して。聊その功あるに似ること。況て克ち人彼
法にこゝ邪術とゝ人どもその用ゐる所に於て全く邪なるざる者なり。これ世
間善に似て悪とする処まこと悪に似て善なるあり。縦令ば今北條氏将軍に暗
君あり。ぞ拉戯とのこと好こゝ人。然るとその父子勇めて。国家の大任に執
まるこ。実に周公旦ゞ成王に於るゞ如くこゝ人。その実い漸こに墓奪するの
意あり。善に似る悪と巧。連枝と斃功臣と黜けんと計るこ。一朝のこに

朝夷八編巻之三
一睡の間に義邦
歓楽を極む
義邦

朝夷八編巻之三
孔雀丸法師

あるべき。君のその奸謀を発さんとするの一人なり。嗚呼危ふいかな。
今不佞が初め隨ひ。云為の境、必ず人なり。身を殺すとも天年を保ち。
且子孫連綿さらん。然るに恩愛と名利を羈束。俗塵を免れあるべし。一
命を暮を縮まる。子孫断絶して祖先の祀り。永く絶んと必せり。不佞粗来
然と考へ。かくまうせども凡心あり。更に信用あり難ふんと。その説く所は
大うに笑ふのみ。実にいまだ信せず。然れども這回の院雅宗に
四郎が修道院と図って隠まんとせり。彼方知らぬ顔を
ありて居と誠り。並松として遊ぶ。現に神仙の徒なるべし。誰かよく是を
為べきか。奇特のあるを思へば後来のを逝べるべし。如何ぞ一人肥和千
條の糸の連ねるべく。更にその解術を考へば。黙然として居るべし。侍る夢
莽に対ひ今先醒の諭しを大に感ずるべし。在下まべ。

言はべし。そもそも人の世に生まれあるは。妻子従類を思ふが故のこと。然るに一個
至を避て。云為の域に入ることを。妻子従類の欲をとどめ人びとれもまた是
雖し。然れども伯夷叔斉。悉陀太子妻子を棄て壇特山に入りの人。苦行
して成道しの人。そもそも衆生を済度の為に。未代法祖となるべし。これ僅に一
身を易く迫なるのみなり。更に世界を益まるべき。凡そ武門に生まれる者は弓馬と
家の業とする。縛ある所の命を忘れ。妻子を忘れて。ひたすら征し。天下を安と
清うする。宸襟を休め奉り。志を抜きんで丞相太保の職を授け。名誉
挙げ祖先を輝かす。これ忠孝全さしめんか。若志を得ざるときは塞がる
潜んで。一朋を絶るまでのことなり。奸臣の徒なりとも。吾よく獨を慎む。
行ひを正しくせば。何の恐れか有らんと。存ぜるは如何ぞ。行ひ人の道
論あるべ。法しのひれしのひけるべ。夢莽に安て足下が初極めて理を要す。

然れどもこれを以て名利に羈ぐる人々いと少し。古昔巣父許由ぐ花を翫
量道徳備へ、世に立雑らず隠れを以て人に貴しとす。然れども
人々の志を取ふ有り。強ひ勧め強ひ。誠もぐさりあるべきにも脱ふ
そぐく。頼政の裔なれども栫営の連枝なれど世の景勢と厭ふの所り。
最も女児と棄てこの人が門に拉ぶ。凡俗の楽えむ所い酒食あるべ
絲竹管絃或ひは姣き妻妾を愛し。まさに子孫の栄ひく末とす或ひ
荘厳美麗の家室狂羅の裀褥珠玉の枕或ひ官位の進むこと是の
他に過ぎて道術を修して楽むい。言葉を以て尽くすべ開ひ以て深
暁る。今説とはこの詮あるべ已にとはも素凡夫なり。父子の恩愛を世
間の人に伝かるべ。さればこれ棄てるに忍びざるの情ひあるべ世利に思ふ
碌々たるその中に。まさに彼嫌疑と稟るに至らば。祖先の仏光を汚すべ

遁世の志先年より頻るべ。ことに不孝の罪を忍ぶべ。今ぞ思ふ果さざるを。
脱に光仲と塔して世に思ひ罪とす。頓に遁れ去りのみこそ。然るに光
仲に大功ありて寸罪なき身なるべ。彼奸計に陥り已に家滅ぶべ
いらばしと雖。然れども食邑なる。太田の荘とその侯に放てきざるべその業。
已に世を遁れ故。倘光仲と諸共に徐公孫会人なりなば。如何に有るべ
べく。孔子も苛政は虎より猛しと宣ひ。栫子厚蛇補
ふ者の説とす。死を犯して蛇を捕ふと。以て幸ひとなせること。酷吏が苛
政に遠ざかるべ故。豈ときど人情なるべ。思惟七後未の
天地と図まるべ畢て然れども。当下乾坤九人に東窓の日新ること。
貴客定めて労まるべ。空腹なるべ。今まるべ。
頃炊きて進らせんに。まづ且く甘ぞん。労まを憩めるべと侍る

箱のうちより。粟稗などを雑へる。穀物を把出し。加世丸法師に分付て。是を炊くその間に。道人は夢葬を伴ひ。行ずの行を修をして。一間の寝に入りけるに。冠者はさて一個にあり。言葉敵もあるざまに。稍に渾沌の労をとりて。吾にもあらぬ間睡さり。加世丸法師をもとこんるより。彼もまた食を拵出冠者が脊にうち著せる。冠者はそをまとえ初めて。時の間に熟睡せり。かくて一晌ばかりを過ぎ。そもそも汲の疾熟せうど。快く眠まるに。揺起さんも行得とも。そひさりて加世丸法師は曲突の傍に書かれ披をうけて。傍に合ひた其折り。冠者は暴に声を揚。嗟若しやと叫びて。眼をひらきて四方を視て。いと猜疑ある面持なり。加世丸法師いかの変に。後をそ書をさしおき。冠者を看ていかにの心地の悪きやと。問まて冠者は漸に肝の沉めて吐息物を。傍に夢をそなりけるとぞ。復欲息さた。加世丸法師は膝を進め。物に魔はるるなり。修道院が邪術にあらんと。辛きに遭の人は心に深くそれをおもふに。夢の中のあらんとて。冠者を慰めあらんとも不測の変をうけるが。実に須臾刻の間にて。人生百年の栄枯を竭さう。尚に道人が懇に示しの人ど凡俗のものを半信半疑なりしの人を。舊の不和のごとく粗悟せぬ。いかに一期の歓楽栄曜へは。水上の泡に有なく。まことに朝露の果敢なれ。似る哉と歎息に。加世丸法師かくと呟よう。開はまことに夢をうけ人の人。若しうづは頓て帰り。咲の人と云ふ。炊きさる飯を進む。冠者は法師に一礼して。まづ飯を吹ひ畢りて。炉の傍に身を倚せり。物語長ものうるまどに成れり。炉の傍に身を倚せり

續輯第十八

耶鄭るくれ草庵の夢語
石戸の旅寓家族の歎き

そもそも般若の銘文ハ。如夢幻泡影と説きて。夢ハ果敢なきものなり。然れ
ども上代ハ。夢を以て懲とせり。和漢ともその類寡なく。殊ハ應神の聖
主なり。夢を以て宮祚を定めたり。太宗の魏徵南帝の楠。
のよき祥なり。その時枝葉ハ遑あらず。當時平尼ハ墓ハ。妹の多と購ふ。
終ハ幕府の山墓となり。物ハ人を人物となり。さて人間詰休類吉見の冠
者義邦ハ。加世尼法師ハ。ちち對ひ。尚ハ吾労き。まくハ間睡ともなく熟
睡ぬるに。寝さりしかハ身ハ安を人ハ。昨夜辛き目ハ遭ひしと。漸ハ夜
石戸ハ帰り。妻と始め手負の人ハ。在り容と物語り。或ひハ泣き或ハ怖れ。
まづ恙なきを祝ひ祝さを羽ひ暮さと一旬ハ。一日門ハ人ハ農人等。
奔走して殊食より。畠山刀称安達刀称。その時刀称原成改とて装束ハ
花々ハ。使ハ下向のうへ。外らふまうさんとて。憶ひけまべ仏ふそとて。

殺けど猝急なり。何と准後をまそる間ハ。農民門の安内ハ。件の
諸士等ハ威儀を正ち。宮小四郎ハ家ハ来り。客の間ハ屋流ハ尼ハ墓の
命を禀吉見刀称ハ言ハ。下向せり。頓ハ拝謁を殺ハ。その
主ハ更ハ分さ。辞さべきハ。彼等ハ相見するハ各ハ坐ハ平ハ
て這回将軍頼家卿ハ。ハ孫叛を企ひハ。ハ家を丸さんとしハ。伊豆
の修禅寺ハ幽閉す。ハ。で生害を勧めまゐせハ。ハ実朝卿ハ。その家系を嗣ひ
ハ。右大臣拝賀の夜ハ公暁の為ハ弑せ。今ハ幕府の血脉絶さり。尚ハ尼ハ
墓の命ハ。君を正ち故右幕府の甥を渡らせ。頓ハ孫食ハ渡御
ハ。四代の将軍ハ立せ。故ハ臣等ハ近ひ。差弑さ。ハ君迷ハ弁
容ハ。自他の歓びのこと。天下の僥倖と恭ち額著て致さと他
日ハ異ち。然ま。ハ無智短才ち。争ハ孫食の主とハ。再三辞ぶ。要ハ

許さず。秩父重忠進み出、今暴れかくまうせば、猜疑の条なるまじ。今
まことしやかに。既に右幕府の血脈たるに於て絶んと子固て君を薦むる不具匡
媛は故伊豫守義経君の女児、旁以て君の他に雄う嗣君なるものあらん。
辞ずの心なく頓て薦むるぞ。今は辞さざる可きなり。然いれば強
金人到りて疾より京師へ奏し待てありなる。程なく勅使下向
ありて征夷将軍の宣下あり。崔媛も三位に叙せらる。昨日の辛苦今日の栄
花。掌を返さぬ。一朝に志を得て上る光陰とありけるとぞ。程なく
憂りしけんと。忘れやらぬ性なれ。繚乱を省き且暮に民の艱苦を恤むべ
に世の賢君と敬ひ貴ばれ四海のよく泰平なり。万気のめぐり。そも渇
する者水を索め。水に飽が湯を思ひ。湯に飽きては酒を思ふこと人慾れ
慣ひなれ既に志を得ては及び。何ぞ心池を。既に将軍の貴きに

固辞すれの楽しみ。苦しみと折れい。酒宴を設け嬉遊する。美女を
辞退せ。粗拙を真とすけるが。その舞妓の桂といふ。年の比十八九に
なる。嬋娟たる両鬢に蝉の翼に殊なるべく眉に遠山に没んとする脳の
新と摸し。丹花の唇芙蓉の眸。肌は雪より白く。姿は風に揺れ靡く。
岸の柳もものうしと。なんぞ美女なるべ。何時となく心を傾け。最も
の妾なるべ。程なく子を産し。崔媛も夫より後。数多の児を産し
ぬ。宮中自然賑ひて。三の年歳の春を経ひ千歳の秋を唱へて。
元久三年を経ぬ。子等は各成長して武門の妻を迎へ臣下に列し
その子その孫次第に繁茂し。数多の星霜を経て。算られが厳かなり。
およそ五十年に余り。吾歳もやく八十に近し。なるまでもその容貌衰
昔の容に変らず。弥ますます健なり。加倫崔媛も。桂もまた変ぐ。

然まべ小町が面げの変らぬ年の積まりと弥さりしと今更ふ嘆ぶぞり也ぬるが。熟おりふ彭祖が寿八百歳も竭る期あり。千年の松もつゐ朽ざる。願ひくは老ぶ死ぎの。茉あ〜ぐ索めんとふ至て凡俗の情態を現し。索めんとまるふ容易うず。こふ一人の道士あり。その名を徐伯とつるが吾を茉を索むると笑。その法を授けんとつる。吾拓さぬことを問ふ閑室ふ伴ひ人を避て君の貴さもん所あることを索むること容易し。然れども一味。得ぐ死品のゆゑり。這ハ君が日来より。最愛ぬ女子を殺し。その生血を雑ゆるこ。乞妻妾ふ限るとの。吾笑て一人の妾を殺すも難さふあ〜ぶ。こまを為ハ不仁ぬ〜んといまぐ主心を決せぬ。然るふ桂ハこのゆゑと。何ぶ知りん。心の中ふ憂へ。最老の妾とのべ。まづ第一ふこの所へ謀計をとりて。この災害を避んあい若べ〜ぶ。と已が年来月とかく。女子どもふ分付て筐

嫉いこの程より。権ぶ北條義時と。容ふ妻ぶ夫のこゆゑ桂を嫉こそ。殺さんとつるよ。こ容ふ流ぶさせ。ゆゑ。何ぶとなく吾耳ふ入り。孤て眞〜〜〜祝ぶも。七人の児ハ産ぶしも女ふ心弛ぶ。と昔の人もいふ。ぶれ。偽のふも計らまぶと思ふ。ふ統て筐が容を。所ゆゑ窺ふふ。怪しとふ風情もあり。偖ハと嫌疑を生ぶるより。行その容の怪乳ゆゑ風ぶ全く偽ゆゑ。と色より渠を疎めども。証拠とゆる所もあ〜ねば。そのまゝふ迎けるが。一夜桂ハ吾国ふ。建〜屋風の外ふ居ぶて。浸然と。浸声を吾ぶ聞りて。何ゆゑの心ふ恢ハぬとありて。かくら憂へて人ぶ。ぞと問ど。路あい言ざりしが。強て問まて。涙と。ぶ〜〜〜ハいとも賤ぶく。仇ふ。所ふあり。あ〜ぐ。ふ世の果報あり。こ更月ふ二人ぶ。貴人ふ。ぶらまてこの年月ふ。ゆゑ。人救ゆ。ぶ。鬼の毛ふ。ゆる。ぶ。心ふ恢ハぬと。仇ぶ。ぶ。啻悲〜さハ。ぶ。今。限り。ぶ。ハ。ふ。

塞がりて。女子心の浅ましくも。妾に涙こそ御心を残り参らせられ。赦させ給へ
と平伏ぬ。吾等ハこのまゝにてすむまじき忌としきとの人ぞ。五日侍ふ居るとも。今宵限り
とハ心得ぞて。聟ハ彼地へ往んとする。止るれどもとらへのみなるらへバ。桂ハ猶咽かへり
て年来の恩を棄。彼地へ参り侍らん。妾も往ドと云ども。死出の山路の案内の。
自由ならぬものと嘆く。聟の夜ハ更て破風へ起行ならずの覚悟あれどもさらぬ体
泣伏ぬ。舅の心の別がたき不便屋間けまさバ。桂ハ涙に對へてかへすがへす。假令今より終る
とも。いかにそれとも定め侍りしとも。伊賀の行末を憐みあひ給まで不向世ならで伯ぬ
まで。隠して君に物ならぬ人を掛参らすも。否ずとも。祷まさバ果ずて告参らすまじと謂て
その御臺所霍媛との身を勢悒なさまし人ハ生るし侍れども年来の恩愛に免るゝ
てあらハあるべきことじと心を易んじ給りしにその噂ハ虚言ならば義時ぬしと世綴より内に
示し合させて堀藤次といふ士にかの身を殺せと命せらる。藤次畏こまり今宵

失へんとしけれども。平生より早き召により御傍へ出させ給へバ。渠が計らひ諂諛の徒
なりしかど。聟ハ御臺の御方に。蒔媛を召せらるゝ御遊興のその折なれバ。かのものが手をふれ
と疾より御沙汰その時こそと堀藤次が構へたりし定めぬはなれバ。からて召させ
参らせハ何ゆゑの御咎あることも知るべからざれバ。諫めて失ひ給まん。右ても左ても遁
れざる所その禍の詮方なくさらバ奔まで身を遁まんとも易からぬ仙にとする時ハ。歯様
ふこと御臺所のおん計らひとぞいへば。御臺の非道といふべきに。他に洩すハ不
忠なり。むかし箕子といへる賢き人ハ。君を諌めて容られず。関て退きしが。他の人の何
由なきと問を厭ひ。狂人の真似してありしと云。這ハその君の悪をもて他へ洩さざる篇なり。任
意命をたさるとも。御臺所の御恥ハ即君の御恥なり。争ひをまさで著まで此を遁るゝ
ことと為べきまで。所て殺をも不如なり。と覚悟なりしも今更ふ別れ参らする悲しさに心
弱くて涙を滴し有のまゝに告参らする。暗に其の御中を隔つるの理なきことなれども

罪深く死とりて構人他いあり。とき法然と注おろ。當下ヨ是心おそくい生死より義時と崔媛と忍び逢う。粗凡少いあり。。泥拐ぶおるたこなるとば。その侯おを捨おきと這田渠を商伐お。最愛ある桂女と失るいんとるせる条。

茶すふ桂女。その性怜悧の故お。両個ゞ性きを景勢と幽くんるりのるべ。とお於て欝悔あり。堀藤次お密意と示。失いんと計るるん。桂と年頃老せるとん。崔もよくありて在り。然ると今ヨ。姑こもやゝず。その頃暴お於て妬こ心と生じべき。然まびその本い密會のことお依て起るあり。その死不良の行ひありて。その妨とあるんと厭ひ。吾鐘愛せる側室と害さんとする悪逆死后争うことと赦さんやと怒り心頭お於ゝそ。その翌日崔媛と。吾ゝを撰て刺殺ゝ。ひ殺ぬ不老不死の茶さえも調ひあと。その血と把て茶お雑べ今こう後い千萬年死さるとうべとあるべゝと歓ぶりのゝ密夫義時。その中お兵と伏せ。失おりんとせゝうども。渠そのことと洩ゝ。所労ゝ号ゝて出在て。あるべ。因て便宜と窺ゝ所お夫より毎夜崔媛の幽魂宮中お現われ。怪の奇怪とあり。因て諸山の高僧お。その祈りと命ぜゝうどあるゝお立ゝ。終お桂が咽吭と。咬ひて彼と殺ゝうり。彼そもいまゞ飽足らずや。その産る所の子。その除服腹の子孫お至つて。三十除人一時お死せり。吾大樹の任お登り。五十餘年ゞその間。更お憂へと見ゝとる。歓びのゝゞ多ゝゝも。殺ぶべき世の慣ひ。親族多ゝ死果て腸と断哀別離苦。河お尽ぜゝうもあゝべ。崔ぶ執念と怨霊の。黄泉ゝる所。為ゝいゝ本と推さるい義時お。起りゝる禍ひなり。

然まび渠と滅ゝ。この怪憤と散ぜん。と密お軍勢と催ゝす所。渠逃早くること。と。暴お多勢と促ゝ集め。無二無三おゝち囲む。此方いまゞ合期せど。在合ゝ兵おて防ぎゝ。ちゃ風上お火と懸ゝり。故お炎お吹ゝ。

防ぎ注ぐる兵あり。その間に義時公、営中へ籠入りぬ。頻に鋒を避ぬと。
近臣等ぶ注進ふ。如何とも詮方なく、十人伴りの従者を引て、営中を遁れ
出て、猶敵軍の紛ひ蒐ぶ遁と果べきやうもあらざ。従者諸共辛じて。
由井ぶ濱辺ふ到り著き。海郎ぶ囮引の小舟ふ乗り。伊豆へぶ往ん武
蔵ふ。金沢へぶ遁ん。と漂人処ふ定ひ。海上暴ふ颶風起て。楫を摧
くふ至らんとん。這い便すと色を失ひ。艫を推し揖と繰れども。ふり〳〵塩ふ
べきふ〳〵ず。十丈可の高涛ふ。舟は木の葉の内めく如く。爽時に漂ひ入れ
ども。もとより懸る荒波を潜り雅て。ふる舟。忽地ふ覆るぶふ聊に水涙
を。ふりとの〳〵と逆捲く潮。透間もあらぬ高波ふ游ぶ果べきもふく。
さや息ん絶んとする。その苦とふ思いぶも。声を発せ〳〵のふ〳〵と大息ふて
物がる傍の戸を引開き。主当る乾坤道人夢葬も後方ふ引副り。當下

冠者い夢葬と見ぶ。さて憂るの面持あり。乾坤道人声を揚げ。吉日の
君上五十年の盛衰を暁らもふ。実ふ人間の栄枯得変ぶ一時の夢ふ竭ぬ
君ぶ今の夢物語已も物の陰ふ生ぶり。抑盛衰の交る。誰も粗知る所
ふ〳〵新ふ事を説ふ及ぶず。およそ人の情態ハ今の夢ふ至り尽せり。そもそ人
身を立道を行ひ。父母祖先を輝くさんと。人ハ善の善る所。さて志を立ふ
及び倍ふ。その成を惜ぶ。民を恤ぶ士を愛し。世ふ比ひる人賢人と上下歓び
称ゆる。終ふその心懈り。吾辛苦して位階も進ぶ。富ハ天下を有ふ至る。固
計ものを〳〵んとん。誰ふい織り雅ふ答めんと。自雅ぶ遊戯をる。ふ。指ふい
性の娯ぶふ費を散ぶるの企るも。再三再四ふ及びて。稍ふ美麗を尽すふ
至り。号を〳〵ず乱行ふ流をもけども。その不善を省を〳〵ず。ふ〳〵心の乱を
ふ及び終ふ百悪の基を開く。ふ〳〵ふ初めふ做る。善ふハ消ぬ。さて悪報ふ

朝夷八編巻之三
世態を説て
乾坤道人
義邦を誘ふ

朝夷八編巻之三
義邦
けんゑ道人
むりん法師
加世丸法師
二十七

國家を喪ひ身を滅ぼすに至る。初め不障の善ゆゑ。後大障の悪を致す。
と天台止觀の要文も。この心をよくゝ古今の人情の弊を免れがたし。
しかれども。然まで初めより可もあらず。不可もあらぬ中にも世間は安らか
成ぬ。俗の常言にも。无ものを貴人とゝなるぞや。凡そ始めあれば終あり。
昼夜長短の毎に消息のゆゑと能く思へ。因て吾輩の修する所。云ふ所
樂とゝ。奚為一時の栄に誇り。後の悲を俟べからんと諭さるゝ。冠者は
点頭むべし。邯鄲の旅寓も。五十年の栄枯を暁る。盧生が故事に彷彿たり。
実に一期の歓樂は一朝の露の如し。在下篤と思惟して。今より先醒の徒
才とゝ。夢覚老人と諸共に世を避んとぞ。許容しのべ大悦ぶ。
とゝに道人も歓びて。頓て冠者に戒を授け給へと教へて。家に伝る
念を断ぬむ。紫下某生再説ゝに波宮小四郎父子の者ゝ。びに馬何標吉

郎は林原に弛ぬ。ゝ果ゝて鹿のありゝあぞ。這は屈竟の獲物ゝと大に
歓び逐ぬぐ。て刺留ると三三匹今日は生憎不猟なりしと
ゝゝに薄暮に及び思ひもかけぬ獲物あり。ゝ珍重ゝと頓て列を等に
擔いせてうちえんとする時に風雨頻りに起りければ各両具の在備ふる
所に心急うまて馬に鞭あて弛出ん。ゝ標吉郎は主に対して在る
が右に左に心かまて鹿の出るに猟んとも。ゝ彼方と顧ゝ心に見て渓
所に農民们両三個端く走り来て標吉郎が侍に近づき刀称に見て渡
らせ給へ。心あてありゝるが並松ゝの小狗が隠れ川あてに流さまに不便思
ゝゝの往方をゝ彼方へ弛の人間に君達が俟の人と下僕们ゝ此ゝと
称せ給ゝの程ゝ力称ゝの所へ来の人らんとのひるまに標吉郎は
点頭て然らば暫くゝ俟んといひて樹蔭に馬ひき迴 雲丹憩てあり

ける所ゝ曇て空の猶暗く大風さへ吹出て両八車軸を流すばかりゝ降来
ゝけるに標吉郎もこゝゝ得堪ぬ逢ゐる此方ゝ白亭のあるを入つけ。それゝ
軒下ゝ屈まりて居ゝ弘義父子の者その他列卒等もこの両風ゝ吹散
とゝり果て眼ゝ遮る所ゝ人一個もあることなし。殊ゝ日さへ暮果て物の善
悪も分ぬときゝ雨はまだ頻ゝ降者ゝ冠者ゝ彼此と移遷さぬこの両風ゝ障ら
まて困ゝ果て在さるゝんと心も弱ゝあゝれども。その路をさへ辨へぬ今まで爰
ゝ集ひる。雑人等もいかゝ方へ隠ひそその投内とさへべき去もあぐれば。
心頻ゝ焦燥のゝ更ゝその術を知らずまぬ遠近の見る間ゝこゝ居ゝ冠
者ゝ便宜を俟ゝ日暮ていその憑こゝも失ゝ独居て白亭を取
ゝ五十ばかりの老媼一個糸繰居ゝ。標吉郎ゝ声をかけ。吾ゝ如此の去
ゝ急雨ゝ遭て難儀せり。且ゝ宿てんやゝ老媼ゝ答ゝ

辛ゝじゝ人ゝ多ゝ来ゝ此方ゝ入らせ給へと帯をとりて板敷を掃ゝ設ゝ歓待ぞ。
標吉郎ゝ屋ゝ掛て笠把ゝ濡ゝ所を拭ひ。ゝ温湯を欲ゝ思ひ。
ぬ暴雨殊ゝ風さへ強ければ辛ゝ果て不憶阿分ゝ。ゝ老媼ゝ問給へ
この郷ゝ久ゝ領主の在さぬ。この頃吉見ゝ中頃さぬ及ぶその
内の地方ゝ今より永ゝ恩を被ふべと吾ゝ阿分と名乗べき先
幾ゝ雨風の止む間と雪ゝ候ゝ人ゝ。ゝ荒屋ゝ何ゝ進らすべき物
ゝ背戸の柴栗三箇三箇拾て焼てもあゝせんと笹の裡ゝ歩す。標吉郎
手を挙て心を遣ひ腹もよし。你ゝ如く昨今刀称の入部ゝ。ゝ土地の業
内ゝ人ゝ。ゝ今日ゝ武人の勧めゝ待会せ。ゝ邑ゝ刀称と我ゝ。
其ゝ人性方を定ゝ。故ゝ此処ゝ呻吟ゝ。ゝ東ゝ辰巳の方ゝ隠ゝ
知ゝ。ゝ人ゝ。その門を越て水下ゝ何ゝ人ゝ所ゝ。ゝ義千の道程ゝ。ゝ知ゝ

教てよとこの不老温い首と傾け。隱川より東の方い人も多いぬ林原ゐそ。その奥ゐい狼溪羆が岡ゐどいくるあるよ。土地の者さん猥ゐ足踏いまゐ魔所ゐそ行り。狐狸いさ〳〵ゐもいそぢ。天狗も多く栖とるせば若遇とかの死行くるゐい再び帰らぢ。現ゐ怖しき不ゐり。とまりし佛人行くるまば。誰も彼処の業内とぢ。知りくる者のいゐと語るゐつさて再想ゐゐ。俚俗い殊ゐ僅ゐるゐ。さゐ惶怖もとかくこそいひ伝るゐゐ。然まども土地の人民浴るとい人べらず。冠者い夫ゐるのとも知るを並松が流ゐ隨意さ行方とゐく遡ゐ。かの魔所ゐ入りゐ頃日い暮て南風の不憶も烈ゐくゐり。その帰ゐき路さ失ひゐ〳〵ゐのゐん。嗟便ゐと云ゐも棗ゐゐ胸のうちかくゐあゐき心いあ〳〵れど更ゐその術と知るを。祈日ゐ〳〵ゐ再おりゐゐで安閑と此処ゐあるよりまづ鈹人立帰り。宮の父ゐとも譚合ゐん。冠者ゐも処より引退ゐ今頃い宮の鈹ゐ帰り在とも知るべ〳〵ぢと思へば心急ゐまて。こゐゐ老温ゐ暇と告へ門きゐ繋ぎ馬ゐうち猗ゐ面とゐが抜くゐる。雨ぢゐ厭ぢず驀地ゐ石戸ゐ到り小四郎が鈹ゐ帰ゐて容子と問ゐ。笹媛と初めこ。一家の者ども僉聚ゐて冠者と馬飼摽吉郎が。彼方いゐと思ひ化ぶ媛いその顔こゐるゐ。摽吉よ今帰ゐ〳〵ゐ。刀称も汝と緒共ゐ飯りゐ。ゐ何ゐと問れ。摽吉ゐ処ゐ坐とゐて在〳〵ぢゐと物語。若ゐ疾ゐゐ鈹へ帰りゐひとりゐと今ゐ心ゐ頼めも。甲斐ゐ〳〵ゐと嘆息ゐ笹媛いゐ一笑のゐ。ゐ暴ゐ酸鼻。餘の人い右も左も。你い刀称ゐ屬副てゐるべ〳〵ゐ。かくゐん帰りの遅きとも。然まゐゐ思ぢ〳〵と偖い両個ひゐ。個ひゐゐその化彼方と知〳〵ゐ。猿内も知りゐいぬ林原ゐゐるゐと。怨る怖しき魔所ゐ入り。千ゐ一つゐ化物の上恙ゐ〳〵ゐん。今更いゐも女ゐの恙ゐと。吟と笑ゐ〳〵ゐ。彼並松こそ

吾們が禍ひの端なりしと嘆きて頓て小四郎ふうち射ひそあん所第六人この所ふ
古く住ミ土地の按内いとく知りつゝん今より馬飼摽吉とゆて寄者が様ご孫
索れて拾ねと宣て弘義その子董次秋弘ゆ口と拵へそん作せあや及ぶべき
然るゝ今夜陰とひ殊ふ風雨の烈りくて炬火ゞふ滅さまとるべ只呻吟のこ
詮方ゆゝん東雲ゆゝむ比ようて人数と引俱しに従方と索彩んい易ゆ
べ馬飼めふ語まる老媼ハ何の聴怖ゆいざ知られどもこの郷ふ然る魔不
ゆどの有べきゆハ両ゆハ辛じゆんとも。あん所ふ恙るきゆハ鏡ふかけてゆんる
如し心易く思せよと笹媛を慰めて夜ハ俱ふ寝もやゝず暁と俟に
けり

朝夷巡島記全傳第八編巻之三終

早稲田大学図書館
011888007530